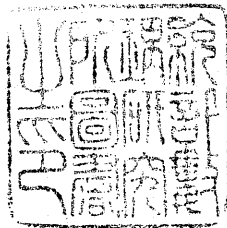


T 02
N 49
49

# 日本における統計学の発展

## 第 49 卷

話し手                  松        下                  嘉 米 男  
聞き手                  鈴        木                  雪        夫  
                            西        平                  重        喜



1982年10月7日 (木)

統計数理研究所にて

## ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行\*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜\*(代表者)、野沢正徳、広田純\*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎\*、三瀦信邦\*、森博美\*、山元周行(\* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上



鈴木 松下さんは、中学校は豊橋ですね。

松下 僕は東京と両方です。

鈴木 東京は、どこですか。

松下 府立4中（現戸山高校の前身）です。

鈴木 それから第2高等学校理科ですね。そして、東大の数学科を卒業されたのですね。

東大の数学では、数学はどういうことをやっておられたですか。初め、確率とか統計なんというのには、おそらく関係なかったんじゃないかと思うんですが。

松下 関係なかったですね。代数と整数論をやっていたんです。整数論も代数的整数論ですね。卒業するときは、トポロジーなんかちょっと勉強しましたがけれども、その後とにかく代数と整数論が主で、大学院を1年やって、その後助手になったんです。

鈴木 助手は、何の講座ですか。

松下 そのころの東大は、それが決まっていなかったんです。結局、数学教室の助手というわけです。しかし、末綱先生とそれから弥永さんが何かにつけ、一番近かったです。主任教授は掛谷さんです。それから、学生の後期のときからぼつぼつ論文を書き始めていました。

鈴木 学生というのは、学部学生ですか。

松下 学部の学生です。

鈴木 卒業論文というのはあったんですか。

松下 卒業論文はなかったんですけども、僕は卒業論文みたいな形で書いていたんです。それは、日本数学会の物理学会の記事に出したんです。

鈴木 それは、どういうテーマで……？

松下 それはやっぱり代数、整数論関係です。初等整数論では、基本定理といって、普通の整数が素数の積に一意的に分解できるというのがありますね。その拡張として、代数体において整数イデアルというものを考えると、そのイデアルが普通の有理整数の中の素数に相当する素イデアルの積に一意的に分解できるということが云えます。それでそういうことが代数体のどんな条件のもとに可能になるかということ調べ考えたんです。代数的な整数全体は、(代数的な)環(リング)をつくるわけですが、抽象的には、一般にそういった環の中でイデアルを定義して、いまのようなことがいえるには、どんな条件があったらよいかということです。こんなことをやったわけです。

鈴木 卒業は昭和16年でしょう。

松下 そうです。

鈴木 そうすると、15年とかそのころもそういうことを書いて……。

松下 やっていたんです。数物の記事に出たのは16年でしたか、ちょっとおくれますからね。発表したのが15年秋ごろ、数物の会で発表したんですが、実際はもっと前からやっていたわけです。あと、もう少し別な角度から出発し、新しい結果をつけ加えて書いたものが、日本学術研究会議(いまの学術会議の前身)で出していた「数学輯報」という雑誌——いまでも出ていると思うんですけれども——それに載りました。昭和19年ごろだったと思います。

鈴木 大学院1年やって、そして助手になられたわけですね。

松下　そうです。助手になっても、実際にはそういうことをやっていたわけです。そうすると、戦争が始まったでしょう。そのころ、科学者は戦争に協力しなければいかぬということがいわれまして、数学の連中もざわつき出していたんです。僕はたまたま佐々木達治郎さんという人を知ってまして、あの人が工学部で、飛行機の問題で陸軍の第5技術研究所というところから委託されていたことをやっており、研究班をつくっていたんです。そこに来ないかといいますから、そこに顔を出していたんです。そこでは、飛行機の翼、或は乱流の理論とかいろいろなことをやっておりました。そのとき、陸軍の技術将校なんかも来ていました。

それと別に、数学の仲間で、何かやっぱり飛行機に関係した問題をやっていました。だれがいたか、ちょっと覚えがないんですけれども、それで僕は辻さんと、阪大にいた三村さん、そういう人と一緒に、群馬県の太田にあった中島飛行機の工場を見に行ったことがあります。それから、荻窪のいまのプリンス自動車のところに――太田の方は富士重工になったと思うんですけれども――工場がありましてそこにも行きました。飛行機をつくっているのが、中で海軍と陸軍に分かれているんですね。そのときは海軍の飛行機をつくるのを見て回りました。

具体的には別にどうしたということもなかったです。当時そんなことをしていたのですが、尤も飛行機でどんなことが問題になっているかということの一部分はわかりましたけれども。

そうこうしているうちに、主任の掛谷さんがとにかく数学の連中も何とか戦争に協力をしなきゃいかぬが、

それには統計が非常に大切だという話をし出したんです。  
あの先生が考えていたのは、いまの統計とはちょっと違  
いますけれども。

鈴木 どんな統計を考えていらっしゃったんですか。

松下 結局、確率的な考えを入れた、いまでいえばOR  
のはしりみみたいなことを考えていましたね。そのころア  
メリカでは、太平洋地域のどういうところに戦略物資を  
配置したら、一番効率よく必要なところへ持っていける  
かというORをやっていたわけです。それに匹敵するよ  
うなことを考えていました。輸送の問題とか。

鈴木 研究所は昭和19年ですか。

松下 できたのは19年ですね。あのころ、掛谷さんが学  
術研究会議の会長をやっていたんじゃないですかね。そ  
れで、学術研究会議の建議に基づいてつくったわけです  
よ。それも実は、そういうものは大切だというんで、陸  
軍や海軍のバックアップが大分あったと思うんですよ。  
それで、すっとできちゃったんです。そして、初代の所  
長には掛谷さんがなったわけです。

鈴木 東大の方は定年になったんですか。

松下 いや、兼任です。定年になってから後専任になっ  
たんです。6月5日に創立されて、5日に所長だけ命令  
になったわけですね。おくれて河田龍夫さん、あの人が  
実際はつくるのに非常に働いた人ですね。あの人が21日  
ごろの発令でしたか。その後、27日ごろに、僕と坂元平  
八君が入ったんです。発足当時は所員の定員が6人で、  
助手の定員が6人でした。たしか6人じゃなかったかと思  
います。所員というのは昔の高等官で、助手が判任官  
です。所員の方は、内閣総理大臣発令ですよ。

鈴木 もちろん松下さんは所員の方でしょう。

松下 所員の方ですから、高等官何等というので、その  
ときの内閣総理大臣が、陸軍大将の小磯とかいう人だっ  
たと思いますけど、その人の名前の書いてある辞令をも  
ったことがあります。最初、高等官7等です。

ちょっと話が前後しますけれども、その前に、ここの  
研究所をつくるときに、これは掛谷さんに聞いた話です  
けれども、東大付属と云うような、1つの大学の付属に  
はしない。その一つの理由として、1つの大学の付置研  
にすると、人を集めるとき、主にそこから人が来ること  
になり、よそからは入りにくくなってしまう。そうする  
と、広く人材を集める上において障害になるということ  
があったというんです。

ところが、後から聞いたところによりますと、東大付  
置研では通らなかったんじゃないかという話もあるんで  
す。やっぱり文部省所轄の研究所とした方が、帝国議会  
を通りやすいというようなことがあったんじゃないかと  
思うんです。しかし僕が聞かされたのは、人間を集める  
上においてということです。

鈴木 河田龍夫さんというのは、東北大……。

松下 東北で、その当時は第一生命のアクチュアリーを  
やっていました。

鈴木 坂元さんは、これは……。

松下 彼も第一生命にいたんです。

鈴木 大学は……。

松下 東大です。

鈴木 大体松下さんと同期ぐらいの人ですか。

松下 1年前です。



鈴木 助手は、どういう人になったんですか。

松下 助手は、最初にいたのは犬田君ですね。それからしばらくして、二、三人来ましたね。

また話が戻りますけれども、広く人を集めるということから、東大からも1人行ってほしいということになったわけです。掛谷さんが所長になっていたから。僕が前に一応飛行機に関係したことをやっていることになっていましたし、末綱先生がその当時、数学は抽象的になり過ぎたから、もっと具体的なことや基礎的なことをやらなきゃいけないと盛んにいっていたときですから、河田さんの勧めじゃないかと思うんですけれども、僕に誘いが来たのです。掛谷さんに呼ばれて、こういうのをつくるから、行ってくれないかということでした。当時、戦争が変になってきたし、どうしようかなと思っていたところですから、統計は知らないけれども、それでもよければといったんです。

そうしたら、河田さんがそのとき、統計はしなくてもいいといったんです。河田さんの最初の構想は、応用数学研究所にしたかったというんです。だから、いままで首を突っ込んできた物理的なことでも何でもいいから好きなことをやってよいという話でした。それじゃあというんで行くことにしたわけです。そうしたら、後から末綱先生にどうしてそんなところへ行くんだといわれました。

鈴木 整数論をやったわけですか。

松下 さあね。兎に角、もうやりかけたじゃないか。中途でそんなことで投げ出すのはよくないということをいわれたんです。しかし、あの先生は、応用のこともやら

なければいかぬということをして盛んにいっていた当時です  
 から、「まあ、しょうがない。そのかわり、研究所では統計をやっても、家へ帰ったら、代数、整数論の勉強を続けなさい」というんです。(笑) その後、弥永さんと話したときもやっぱり、いまさらそんなところにならなくても何とか続ける方法があるんじゃないかといわれました。掛谷先生の方が、あの先生の立場上、東大から行かなくちゃ困るというて頼まれたという、それではしょうがないということになりました。また、小平さんという人は、数学を出てから物理へ入ったんですね。物理へ入ったときに、物理の学年は僕と同級だったんです。ずっと数学はやっていましたけれど、その小平さんも、移ったときに、えらいことをしましたねというわけでした。(笑) その当時、研究所に入るということは、数学教室では、掛谷さんを除いてみんな非常に大変な、別の世界へ飛び込むという感じを持っていたんですね。

研究所では、あんまり抽象的なことをやってもしょうがないということもあって、河田さんが海軍とか陸軍の問題を持ってきていたんです。それで海軍の方の話で、僕は追浜のところにあった海軍の航空技術廠へ2〜3度行ったことがあります。

それから戦争中、東京が空襲になる前に、とにかく研究所ができたけれども、場所がなかったものですから、上野にある学士院の中を借りていた。それで、空襲が始まったとき、どこかへ疎開しなければいけない。どこか候補地を探してくれといわれたんです。僕は、実は昔、信州の飯田にしばらくいたことがあります。そこは太平洋と日本海の真ん中辺で、空襲なんか来ないようなところ

ろであるし、伊那盆地があって、食糧にも困らないだろう  
 うと思って、そこがよいだろうといったんです。それで  
 実際そこへ行ったわけですよ。

鈴木 それは、松下さんの提案でそこへ行ったわけですか。

松下 ええ、そうです。

鈴木 何であそこへ行ったのかなと思っていたんです。

松下 僕は、兄貴が昔、帝室林野局の飯田の出張所長（今の営林署長）をやっていたしまして、それで行ったことがあるんです。そのとき、そのあたりを見て回って、わりあいいいところだと思ったんです。食糧もわりあい豊富でした。

鈴木 では、国有地か何かを使って……

松下 いえ、それが何にもないから、宿舎は宿屋を2軒借りたんです。それから、研究所の業務をやるために、飯田の教育会館というのを借りたんです。

鈴木 そんなしゃれたものがあつたんですか。

松下 そうなんです。ちょっとびっくりしましたけれども。

鈴木 長野県は教育熱心ですよものね。

松下 そうしたら、豊川の海軍工廠が近所に移ってきた。これは大変だと思ったんです。そこを目当てに爆撃されると。しかし、幸いそこはやられなかったですね。ただ、B29が天竜川を上ってくるんです。飯田の上を通り、一寸先へ行って、東京の方へ曲っていくんです。それはよく見ましたけれども。ちょっと後で、東大の数学教室が諏訪に疎開しました。それで、末綱先生なんかそっちへ行っていましたから、飯田へも1～2度来たという記憶

がありますね。

戦争が終わって東京に戻ってきたんですけれども、研究所としての場所がないわけです。たまたま小石川の早稲田の上のところ、高田老松町といたしましたかね。そこに昔の殿様の細川さんの子孫の屋敷がありまして、細川邸へ移ったわけです。

鈴木 高田老松町というんですか。

松下 ええ、たしかそういう名前でした。

鈴木 文京区……。

松下 いまの文京区ですね。その美術陳列館みたいながありまして、それはやっぱりりっぱなものです。昔の殿様ですから。そこを借りて始めたんです。そのうちそこもおられなくなって、どこかへ移れということになった。

その次に移ったのが、いまの祖師谷と成城の間の労働科学研究所ですね。あそこは、没収されたようなことになっていたんです。労研の方ももちろんやっていました。だから、一部分を借りて、移ったわけです。しかし、全部は入り切れないというんで、その当時1、2、3部とあって、3部は、大蔵省の小栗課長とかいう人の世話で、新橋の東拓ビルの部屋を1つ借りてそこにいたんですが、その連中が、三軒茶屋の昔の兵舎の将校集会所に来たんです。

鈴木 東拓ビルから、また三軒茶屋へ移るわけですね。

松下 ええ、そうです。それで、三軒茶屋と祖師谷、これが大分長く続きましたね。

1部、2部が祖師谷にいて、3部が三軒茶屋です。

養成所については、戦時中、数値計算の人間を養成し

なければいけないというんですね。軍のいろんなことをやっていく上において、計算が非常に大切だというわけで、それをする人間を養成する機関が、統計数理ともう一つどこか、2ところぐらいあったと思いますよ。そこでは簡単な統計と計算の仕方、それと、その当時の計算機は手回しでしたが、そんなのを使うことを教えていたんです。それは飯田へ行っても、その辺の女学生を集めて、やっていました。みんな喜んで来るんですよ。そうすると徴用逃れになるから。

鈴木 できる子を集めてやるというわけですね、試験をやって。(笑)

松下 中でも試験をやるんですよ。そのうち、戦争は終わりましたから、やめたわけですね。その後、今度は統計技術員養成所と名前を変えたわけですね。

鈴木 それは、戦後いつごろですか。

松下 戦後すぐ始まったですよ。三軒茶屋で始まったんです。

鈴木 それはやっぱりGHQの……。

松下 いや、そうじゃないんです。それは独自に、とにかくそういうことが必要だから、やらなきゃいけないということだったと思います。

鈴木 小川さんとか林さんとかは、もっと後で入ったのですか。

松下 林君は兵隊に行っていたから、もちろん戦後です。小川、水野の兩人も兵隊にとられていたのですが、途中で帰され、2人共ぶらぶらしていたんです。それで僕が河田さんと話をして、末綱先生のところへ行ったら、研究所も人をもう少しふやしたいのですが、こういうのがい

るからというところ…(笑)僕は前から2人とも知っていましたから、じゃそれを入れようということになった。

それと前後して、魚返正君が入ってきたんです。彼は飯田に行っていたんです。ところが、水野、小川の両君は東京に残っていた。掛谷さんに、東京が空っぽになっては困るから、番をしてくれといわれたのです。掛谷さんは東京にいたわけですから、ほかの用事がありましたから。

あの先生は全く日本帝国、明治の人ですね。勝利のためということに一生懸命だったのです。それで、負けたときは非常に落胆したわけですよ。僕らなんか、やれやれよかった、これでうるさくなくなったと思った位です。掛谷先生はがっかりした為か、暮れに肺炎になったんです。正月になって、ちょっとよくなったんですけれども、元来酒好きでしたから、とめられていた酒を、まだ医者の許可がおりない先に飲んだんです。それで亡くなられたんです。

松下 所長は、2代目が末綱先生ですね。掛谷さんが所長をしていたときは、実は、掛谷さんは研究所の方は留守がちで、河田さんが実質は取り仕切っていたんです。そして戦後末綱先生が来て、これから研究所をどうするかということをお話したんです。河田さんの初めの構想は、前にも云いましたが、もっと手を広げて、応用数学全般をやるということだったんです。ところが、末綱先生が来てから、今後は統計1本にしぼっていった方がいいということをおっしゃったんです。それでちょっと考えが食い違っちゃいましたから、その時点で、河田さんは研究所を出ようと考えたと思います。その後河田さんは工大に移りました。そうしたら国澤君、その後魚返君が工大へ行

きました。

鈴木 北川さんは。

松下 北川氏は、末細先生がやめてから後ですね。窪田さんの前です。彼が事務取扱になって来たんです。所長は初代が掛谷さん、2代目が末細先生、3代目が窪田さん。

鈴木 窪田所長の後は佐々木所長ではないですか。

松下 そうですね。彼はてきぱき決断する人ではない所長だったと思います。

鈴木 そのころの統計学なんですが、私は28年に研究所へ入りましたから、そのころわかるんですけども、戦後あるいは戦争中でも、たとえば佐藤良一郎さんの『数理統計学』という本が出ましたが、あれくらいしかなかったんですね。

松下 そうですね。本としてはあのぐらいでしたね。それともう一つは、ネイマンの「レクチャー」というのがプリントされて出ていましたね。

鈴木 研究所は戦後いろいろ統計の方をやり出しますよね。確率論とか実験計画とか統計的推論とか、いろいろやり出しますわね。あれは戦後ですね。

松下 戦後です。

鈴木 戦争中はそれほど……。

松下 戦争中はそれ程やっちゃいないですよ。国沢君は戦争中研究所へ来て確率の勉強をしていましたが。

鈴木 統計的決定理論は……？

松下 たまたまフォン・ノイマンがゲームの理論につい

て書いた論文を読み、その後でワルドの千九百三十何年ごろからの論文を見て、始めたんです。ワルドは、インドへ行って死んでしまったんですが。

鈴木 1950年ですね。

松下 ワルドが僕の初めに書いたものを読み、もう少しトポロジーをどうのこうのといっていたということを聞きました。そのころ、ウォルフオヴィッツとワルドは一緒にやっていたんですが、ワルドがこの位の厚さの本でめんどくさい数式を使っていろいろやっていたのを、僕はその主な所は大体簡単にやりましたから、ウォルフオヴィッツはびっくりしたんだそうです。それからウォルフオヴィッツと文通し始めて親しくなったんです。もうワルドは死んじゃっていましたが、僕をアメリカへ呼ぶことを考えていたといっていました。決定理論のことは、そういうことが始まりでした。

それから、ウィルクスですね。彼は日本に来たんです。その時研究所で講演しました。その直ぐ後で、アメリカへ来ないかというんですよ。その前に、僕はインドから来てくれといわれていました。その方は、スカトメなんかが運動して、コロンボ会議のカネが出るからということでした。それはインド各地でいろいろ話をしてもらえばいいというような話でした。それで、それが済んだらアメリカへ行こうと、ウィルクスに云いました。

鈴木 それは、インドへ行く前のころですね。

松下 ええ、インドは、その前に、国連関係じゃないかと思うんですが、スカトメが日本に来て、そのとき僕と会いました。スカトメは自分としてはインドへ招びたいから考えておいてくれといっていました。そうしたら、



その後、やっぱりインドの方からいつてきたんです。スカトメと仲のよかった、パンセという、インドの農業統計研究所の所長からです。それは、インドの農業省みたいなところの管轄の研究所なんです。

鈴木 I S I とは……？

松下 あれとは違うんですよ。あっちはマハラノビスですからね。その研究所は政府関係だから、コロンボ会議みたいな政府が入っているようなものも利用できるわけです。そこを通して僕のところにいつてきまして、そのカネで招ぶという。

そのときに、それじゃどのぐらい来れるかといいますので、僕は、そんな暑いところはあまり長くは居れないと思い、長くは行けないといたんです。(笑) 全然知らないものですから。そうしたら、やっぱり向こうも、いいところ3ヶ月だというんで、それじゃそのぐらいにしようといったんです。

そうしたら、こっちの外務省を通して来たんですね。外務省の出先、いまの海外協力何とか事業団の前身か、そういった種類のところの人から僕のところに連絡がありまして、私の方で切符を手配しますからといつて来ました。それで行ったんです。

鈴木 それはいつごろですか。

松下 今から24～25年前ではないですか。

松下 それで、向こうへ行ったら、その研究所で一応セミナーと講義をしてくれというんで、したんですよ。そのほかに、インド各地の出先機関とか、あちこちの大

学へ行って話をしてくれというんで、大使館の連中がうらやむぐらい方々回りました。向こうの中の飛行機賃はインド政府が全部出すんです。国内線がありまして、それで方々回ったんです。

行っているときに、インド統計研究所からカルカッタへ来るようにと行って来たんです。滞在は長ければ長いほどいいといわれたんですが、とにかく日本をそんなにあけるわけにはいかないからといって、そのときは、カルカッタにはそう長くいなかったです。しかし、インド統計研究所の支部が方々にあるので、そののいくっかには回りました。僕は、カルカッタは一番こっち側だから、日本に帰るときにでも寄ろうといったんです。

カルカッタにはマハラノビスがいて、ごちそうしてくれたりしました。そのときは、あそこの宿舎に泊まりました。あそこでは何回ぐらい話をしたか、ちょっと覚えがないですけれどもね。

鈴木 それは統計的決定理論……？

松下 それとか、ほかのことですね。

デリーの研究所のセミナーでは、基本的な考え方を中心に話をしましたが、そのときコンフィデンス・インターバル対フィデューシヤル・リミットの話が大分盛んに議論されました。というのは、パンセという人は、フィッシャーの弟子なんですよ。だから、ネイマンの信頼区間はダメだといわれている。もう一人、セッツというアメリカで教育を受けた人は、ネイマンを否定はしないし、スカトメの弟もやっぱりそっちの方なんです。そんなことで、大分時間をかけてやったことがありました。

そのときは決定理論の話もしたんですが、僕がそこで

話したのを向こうでタイプに打ち、後から送ってきました。実は、その翻訳を石井恵一君がしたと思います。

カルカッタでは、マハラノビス、ラオとも知り合いになったんです。そのとき、カルカッタにホールデンという男が来ていて、生物統計かなんかやっていたんです。

鈴木 それはインド人ですか。

松下 いや、イギリスだかオランダだか知りませんが、兎に角、あっちの方の人です。それが夫妻でいました。インドの服なんか着ていましたから、大分インドが気に入っていたと思います。

インドに行ったときに僕が一番印象に残っているのは、南の方、マドラスから入って行って、デカン高原の上の方にあるバンガロールというところなんです。

鈴木 気候が変わらない地域。

松下 そうそう。

鈴木 どうして僕がそれ知っているかというと、松下さんが帰ってきて、こっちだったか向こうだったか、養成所の講堂で、インドで撮ってきた写真を見せて説明されて、バンガロールはいつも花が咲いている、日本の5月みたいな気候が年じゅう続いているんだという話をされて、それで覚えているんですよ。

松下 あそこはいいところだと思いましたね。本当にもう一回行ってもいいと思うくらいです。

僕はインドに2回行ったけれども、今残念に思うのはカシミールへ行かなかったことです。そのときに、冬は寒くてとてもダメだというんです。それと、あそこに入るには特別な許可が要る。それを取るのに時間がかかる、といったいました。つまり、インド領とはいえ、自治国

みたいになっているんです。

鈴木 王様がいるんでしょう。

松下 そうらしいですね。本当に行っておけばよかった  
と思うんですよ。いまは、きっと楽に行けるでしょうね。

鈴木 みんな行っていますよ。飛行機で上がって山を見  
る。

松下 そうでしょうね。いま ネパールなんかもありあ  
い楽に行けるようですからね。

それからデリーの研究所での話ですが、向うは人がい  
っぱいいますから、研究所におっきのボーイが大勢いる  
わけですよ。僕は寮みたいなところのゲスト・ルームに  
泊まっていたんですが、そこに食事を運ぶ少年がいるわけ  
です。僕は何を食べていいかわからないから、いろいろ  
聞いたんですけれども、普通のインド料理は辛くて食べ  
られなかった。無難なものというので、牛は一般にはダ  
メですから、鶏の肉を毎日食べていました。大体、そこ  
にいる間同じものを食べていたんで、よく同じものはか  
り食べるといって、みんなあきれていましたけれどもね。  
(笑)

それから、もう2人掃除するのがいるんです。下を掃  
除するのと、机から上を掃除するのと分かれている。上  
の方の男に、「何か床に落ちているから拾え」といったら  
怒るわけです。あれはもう一人の役目だというわけです。  
もっと困ったのは、その連中が英語がさっぱりわからな  
かった。上をやる方は少しわかりましたけれども、食事  
を運ぶボーイが全然ダメで、しようがないから、そのと  
きにヒンズー語を少し覚えたんです。いまは忘れまし  
たけれどもね。

また研究所の部屋に行くと、入り口で待っているんです。行くと、サッとドアを開けてくれる。こんな小さい窓がありまして、中で何をしているかをしよっちゅうのぞいているんですね。たとえば、僕が机の上で、何か書こうとしてペンを取ろうとすると、スッと入ってきて、ペンを取ってインキをつけて渡してくれるんで、初めびっくりしたんです。(笑)

鈴木 自分でさっと取っちゃいけない。

松下 書く様子をすると、入ってきて、ペンにインクをつけてくれるんです。

鈴木 勝手にやると失業しちゃうわけですね。

松下 そうですね。人が余っているには違いないんで、そういうことができるんだろうと思うんです。

鈴木 いまは変わってきたんじゃないですか。

松下 いまは変わったかもしれませんね。兎に角あんな生活は本当に初めてでびっくりしました。その後、どこへ行ったってそんな所はないです。

帰りに、僕は、ビルマを通過してバンコックへちょっと寄って、いまじゃなかなか行けないけれども、サイゴンへ寄りました。サイゴンは、インドから来ると、フランスがつくった町ですから、町がきれいでしたね。あそこに来ると、本当にフランス語が目立つんです。それとベトナム語です。

鈴木 当時はまだ植民地だったでしょう。

松下 たしか植民地でした。

鈴木 まだ独立していないわね。

松下 そこにちょっといました。

サイゴンでは、ベトナム人が日本人にそっくりなのに

びっくりしました。それから香港へ来て、ホッとした感じがしました。水が飲めますから。インドでは飲めないのでからね。本当に日本に近づいてくるという感じです。

松下 前に云いましたように、ウィルクスが来て、アメリカへ来るようにいい、行くことにしていましたが、こっちへ帰ったら末綱先生が再び所長になることになっていました。実はそれ迄一年位僕が所長事務取扱いをやっていました。尤もインドへ行っている間は事務代理を置いた筈ですけど。それで「すぐ行っちゃ困る。とにかく研究所を何とかしなきゃいかん」といわれたんです。インドに行ったときは、仏教とかジャイナ教とか、いろんなことを調べてきてくれなんていわれたんですけども、よくわからなかった。ただ、インドのそういった寺院に行ったら、ヒンズー教の神様は昼寝をするとかいう話だけしました。実際幕をおろして閉めちゃうんです。(笑) 古い寺院でも何でも、はだして行かなきゃいけないとか。

それからしばらくしたら、ウィルクスの方から用意して待っているから早く来いと、催促が来たわけです。

鈴木 プリンストンですね。あれは、フルフライトで行かれたわけですか。

松下 あれはロックフェラーです。

鈴木 あれは家族連れで行かれたんですね。

松下 そうです。

鈴木 インドは单身？

松下 そうです。

プリンストン大学では何か話してくれといわれて、デ  
 シジョンとアフィニティを使う話をしました。そのとき  
 に、アフィニティを使って、いろいろな分布の判別をす  
 る場合に、クラシフィケーションのエラーをこの位にお  
 さえるには、この位の大きさのサンプルがあればよいと  
 いう話を、実例でいろいろやって見せたんです。その時  
 のサンプルの大きさが意外に小さくて済んだことを、み  
 んなびっくりしていました。それで、トゥーキーと、後  
 からいろいろ話をしたりしました。またウィルクスは後  
 に僕の論文を彼の本に引用しています。

鈴木 もうトゥーキーはいたわけですか。

松下 そのときの教授がウィルクスとトゥーキー、それ  
 からアンスコムですね。

鈴木 ワトソンというのはい……？

松下 ワトソンはいましたけれども、彼は教授じゃなか  
 った。しかしいまあそこのケエアマンをやっています。  
 ワトソンは、ときどき僕と一緒に帰ったりしていました。  
 この間来たときは、久しぶりで、忘れているかと思った  
 ら、ちゃんと覚えていて話をしました。(笑) ワトソンは、  
 プリンストンの後、しばらくイギリスへ行っていたか、  
 あるいはオーストラリアへ帰っていたか、どっちかです  
 ね。

鈴木 オーストラリアは行ったといっていましたけれど  
 も、そんなに長く行っていなかったんじゃないですか。  
 あれは故郷でしょう。

松下 そうです。その外、いまトロントにいるアーウィ  
 ン・ガットマンが大体主なスタッフですね。あと大学院  
 の学生がいました。それと、確率のフェラーがいました。

またちょっと離れたところにボックスがありました。それは、ガウスハウスといって、別な建物を借りていた。

鈴木 その当時、プリンストンにはわりあい優秀な人がいたわけですね。

松下 おりましたね。いろいろなところから人が来たんですよ。

あと、プリンストンの卒業生がアメリカの方々の大学で先生をしていたんです。そんな関係で、僕がプリンストンへ行っている間にも、あちこちから、来て話をしてくれといってきました。

鈴木 いまはどうなんですかね。

松下 いまは、ウィルクスが死んでから、どうもそれほど、のことがないらしいですね。アンスコムがイエールへ行ってしまったし。

鈴木 ワトソンとトゥーキーは仲がよくないみたいですね。

松下 そうですね。僕なんかトゥーキーとは、わりあい親しくなりましたけれど、トゥーキー自身は昔から人づき合いが良くないんですよ。いろんなパーティーには絶対出ない、そのかわり、奥さんが出るといわれていました。僕が帰るときみんな招んだら来たんですけども、後から、外の人がああ男がよく来たといっって感心していました。

弟の方のI.R.サベジはミネソタにいたんだね。

鈴木 ミネソタに長かったですね。

松下 そのとき彼が来てくれといっって、僕が行って話をしたんです。

鈴木 ミネソタへ行かれたですか。



松下 ええ、それと、あとシカゴですね。ポール・マイヤーというプリンストンの卒業生が先生をしていまして、彼から来てくれといわれて、シカゴに行ったことがあります。この前ちょっと来た、いまのアメリカン・スタティスティカル・アソシエーションの会長をやっているクラスカルもシカゴにいました。

後からイエールに行ったときに、アンスコムのほか兄の方のジミー・サベジがいたんです。わりあい親しくいろいろ話をしました。ちょうど石巻の日和山みたいなところが家の割合近くにあって、そこにピクニックに行こうといって、奥さんと子供を連れて、僕と一緒にいったんです。彼は強度の近眼ですから、自動車を運転できないから、奥さんを連れていくんです。そこで何時間か話をしました。

鈴木 イエールは、そのころは統計はどうだったですか。ジミー・サベジがあそこにいて……。

松下 アンスコム、それから、ブリスという人がいましたね。いまでもいると思います。

鈴木 決定理論の方ですか。

松下 いや、ブリスは実験的なことを主にやって、生物に関するデータなんかで、どういうところにどういふものが使えるかというような例を集めていました。

鈴木 イエールの統計はそんなに大きくなかったですか。

松下 イエールは、その当時からそんなに大きくなかったですね。

鈴木 ミネソタは大きかったですか。

松下 ミネソタはわりあい人間は多かったですね。

鈴木 シカゴはどうだったですか。

松下 シカゴは教授が5人ぐらいいましたかね。それから、アソシエート・プロフェッサーがいたと思います。シカゴはとにかく危険な場所だから、早く出なきゃあと思っていました。ゲスト・ハウスみたいなところに泊まっていたんですけども、学校の中でも、自動車を常にロックしておかなきゃいけないというんです。また、いまの日本もそうかもしれないけれども、外から見えるところに物を置いちゃいけないというんです。しよっちゅう大学の中をお巡りが回っているわけです。プリンストンなんかから行くと、一寸異様な感じがしたですね。だって、プリンストンでは、その当時は、普通の家で鍵をかけないで、1週間ぐらい留守したって何ともないですからね。この間行ったら、悪い人間が入ってきたりして、もういまは駄目だといっていましたね。だけど、自動車をロックするなんというの、考えられない話で、どこの国かって。

それから、バークレーよりもスタンフォードに先に行ったんですけども、スタンフォードは、そのころ統計にはシュタイン、ソロモン、ケルノフ等がおり、数理経済のグループにアロウと宇沢君が居りました。オルキンとアンダーソンはあとからでしたかね。カーリンなんかもいたが、カーリンは数学と両方ですからね。

アンダーソンは彼の本に、僕が一番最初に書いた論文（二次形式の独立性）を引用していますから、最初に会ったときにいったのはその話でした。彼は、やる事柄自体は大体予想がついていたような気がしたが、証明がなかなかうまくできなかったといっていました。それが僕がやったのはわりあい短くて済みましたから、一番先

に彼が発した言葉は「どうしてあの証明を思いついたか」ということでした。それからアンダーソンとは親しくなりました。

バークレーに行ったときは、レーマンとかホッヂス、ブラックウェルがいました。レーマンともいろいろ話をしました。ネイマンは、そのときはいなかったのかな。去年死ぬ前は大分話しましたけれどもね。ネイマンは、ISIが東京であったとき来ていますから、それで知っていたんです。

鈴木 松下さんがプリンストンへ行かれたのは……？

松下 1958年から1959年ですね。

鈴木 1960年がISIですね。

松下 その前だから58年です。ISIのときウィルクスがまた来まして、その時もいろいろ話をしました。

鈴木 インド人は日本人に対してはいいんじゃないですか。

松下 いいですよ。それから、ユダヤ人が一般的にいいんじゃないかと思うんです。

鈴木 日本人に親しみを持っていますからね。

松下 レーマンと話をしたときに僕は、よく論文を書くけれども、その問題をどうして見つけるんだと聞いたんです。そうしたら、学生を教えていて、演習問題をつくるとき思いつき、それで論文を書くんだと聞いていました。そのときにホッヂスが一緒に居りましたが、彼も同じようなことをいっていましたね。一番最初に行ったころは、まだルカムは来ていなかったんじゃないですかね。2回目に行ったときは来ていました。

鈴木 いまバークレーは、統計はどうなんですか。

松下　それが、前の前の前でしたか、行ったときに、実はバークレーの統計について、どう思うかといわれたことがあるんです。それで、ここはどうも理論的なことが多いように見えるという話をしたことがあります。

鈴木　大きさからいったら、バークレーの方がスタンフォードより統計学科は大きいでしょう。

松下　大きいですね。スタッフも多いですし、学生も多いんじゃないですか。それも、バークレー、スタンフォードにはわりあい優秀な学生がいるといいますね。

鈴木　理論的なことができちゃうわけですか。

松下　それはそうだと思うんです。

鈴木　アイオワはもう古いですね。チャペルヒルも古い。アイオワなんか、どんな感じを持っておられますか。

松下　アイオワは、バンクロフト、ケンポリン、弟のスカトメ等がいますが、ここについては、バンクロフトから聞いた程度のことしか知りません。農業中心で発達したところだから、環境的に統計をやるのにはいいんじゃないですか。チャペル・ヒルの統計はホテリングがコロンビアから行ってつくったんです。僕は、ノースキャロライナのローレーにいたG.M. コックス、彼女と親しくなったんですが、チャペル・ヒルのデパートメント・オブ・スタティスティックスは、ちょっと理論的の方に傾いているといっていました。当時そこに居たのは、ホテリング、ボーズ、ロイ、ヘフディング、あと、ニコルソンです。

鈴木　真ん中あたりのパデューとかインディアナとかは？

松下　パデューは古くからあり、あそこはインド人が多い

いんです。いまでも、G. グラフタ、P. S. プーリを初めとして。プーリは僕が以前教えたことがあります。

インディアナはマダン・プーリ、それが主で、いまサンタバーバラへ移ったJ. S. ラオとかいう連中がいました。インディアナは数学の中にあっただと思います。数学の方は、アルチンが、アメリカに来たときに最初にあそこに行っ、それで立派にしたんです。その後、アルチンはプリンストンへ移りましたが。

鈴木 コーネルも、ウォルフオヴィッツがいたから、行かれたわけでしょう。

松下 そうですね。

鈴木 だけど、コーネルというのは統計学科はないんでしょう。

松下 あそこはなくて、数学とか外でやっていました。

ウォルフオヴィッツは数学です。二度目に行ったとき、数学にウォルフオヴィッツとキーファがいました。それで僕はキーファーとも親しくなったんです。

鈴木 いまはどうなんですかね。ウォルフオヴィッツはもういないわけでしょう。

松下 死にましたね。

鈴木 キーファも死んだし。

松下 いま残っているのは、ワイズというのがいます。

あれはエンジニアリングの方です。それから、実験計画をやっていたフェデラーとかがいた。あそこは統計をやっている人間が点々と散らばっているんですよ。実は、それをキーファが、ウォルフオヴィッツが去った後、1つにまとめて統計のデパートメントを作ろうとしたようです。ところが、うまくいかなかった。その後キーフ

アーは、バークレーに移ったんです。家族はあそこの町が気に入っていたから、キーファーだけバークレーに来ていたんです。

鈴木 単身で来ていたんですか。それもきつとよくなかったですね。

松下 そうですね。ただ、あのときは娘が来ていたんです。しかし、プールで泳いだあと、シャワーを浴びて、心臓発作を起して死にましたから、家族がだれも一緒にいなかったわけですよ。あれもなんだか変な気がします。あのちょっと前に、大学と彼の住んでいたアパートで会っていますからね。ネイマンにもその頃会っています。ネイマンの方は、年で相当衰えていましたから、それは特に不思議じゃないんですけれども、キーファーの方はびっくりしましたね。

こんな調子で、アメリカでは大分いろんな連中と知り合いになりました。あと、人間を推薦してやるのに非常に都合がよかったです。筑瀬君とか松原君もそうだけれども、学校へ入るのに推薦状を書いてやると、向こうで採ってくれたりした。(笑) また、学位論文についての相談を受けたり、アメリカ、カナダ関係の教授のプロモーションについて意見を求められたりしました。僕は、カナダのモントリオールへも行きましたからね。そういうことはインドについてもありました。

西平 僕にも1つアメリカから来たけれども、やってくれるんならすぐ返事をくれとか、その先1カ月間でいいけれども、引き受けるか引き受けないかはすぐ返事をよこせというんです。

松下 アメリカばかりの話をすると片寄っちゃうから

……。

鈴木 やっぱり、松下さんが一番国際性があるから、その辺をお聞きしたい。

松下 あと、ヨーロッパの連中とも大分知り合いになりました。

鈴木 そうですね。ヨーロッパも行かれたから。イギリスは統計は古いわけですね。

松下 イギリス人では、僕が一番初め親しくなったのは M.G. ケンドルですけれども、彼も、向こうから手紙が来て交際が始まりました。最初に会ったのがアメリカじゃないかと思うんです。それから、一度イギリスに来ないかという話が出て、イギリスへ行ったんです。

I S I の会員になるときに、僕の場合は、最初にウィルクスがいい出したんです。プリンストンにいたときに、「I S I の会員に推薦するから、なったらどうか」といわれて、「なってもいい」といったら、「それじゃ、自分が運動する」といい出して、彼が始めたんですよ。

そのとき、日本で自分の知っているのは余りいないけれども、どんなのがいるかというんです。というのは、僕は日本人だから、日本人の会員1人の推薦が要る。それで、或る人のところに彼が手紙を書いたんですが、返事が来ず、その時はその儘になったんです。

その後で、F A O にいた水野が会員になったと云って来まして。

ですから、そのときのサインは、日本人は水野がやったと思います。僕の場合は、日本人は1人だけなんです。

あとは、ウィルクス、トゥーキー、ケンドール、C.R.ラオ  
 だったと思います。その4人がサインしてくれた。それ  
 ですぐ通ったんです。

鈴木 そのときは、日本人はだれが<sup>会</sup>員をやっていたん  
 ですかね。

松下 岡崎文規氏とか大内兵衛氏、もう相当な年でした  
 ね。その外森田、増山、北川等の諸氏です。

ラオなんかは、統計やっている数理側の連中が推薦を  
 やるべきだ、インドはこれだけいるじゃないかというよ  
 うなことをいっていました。

鈴木 松下さんは、ISIの会員には何年になられたで  
 すか。1960年の前ですか。

松下 いや、そうじゃない。1960年の後です。ウィルク  
 スは1960年の前から運動していたんですが、実際正式に  
 なったのは後ですね。そうしたら外国人のだれかが、い  
 ままでならなかったのが不思議じゃないかとかいつてき  
 ました。それで僕は、会員になってから後は、日本人が  
 進出するように、大分みんなを推薦するようにしたんで  
 す。だから、一時はインドに追いつくぐらい多くなった  
 です。アメリカはしょうがないですけども、今はアメ  
 リカ、イギリス、フランス、インド、日本の順で、イタ  
 リーが次位ですね。

鈴木 1960年に東京でISIがありましたね。それまで  
 は、松下さんはISIに出られたことはあったですか。

松下 ないです。

鈴木 その後日本の経済もよくなってきて、外国に出や



すくなってきたということがありましたね。

松下 それからわりあいに出ましたね。最近のところは大体出ています。

鈴木 外国の場合で、初めて出られたのはどの国ですか。

松下 ワシントンへ行っています。

鈴木 ワシントンに行かれて、それが外国のISIでは最初ですか。

松下 そうです。その前のオーストラリアでやったときは、何かで行きそびれたんです。そのとき実は、向こうで来てくれといわれていたんですけれども、それからはずっと行っていますね。

鈴木 ポーランドへ行って、その次はフランスですか。

松下 ポーランドの次はインド、フィリピン、アルゼンチンです。その前に、僕はオーストリーのウィーンへ行っています。

鈴木 ウィーンでありましたね。だから、ワシントン、ウィーン、ポーランド、インド、フィリッピン、アルゼンチンと来た。

松下 そうですね。

ISIでは、教育統計の、Statistical Education Committee (統計教育委員会) というんですね。その委員になったのが、僕はポーランドのワルソーのときじゃなかったかと思います。そのときに何回かそういった委員会に出て、やりとりがあって、その後でいったんは、ポーランドでそのときの会長のグジェルベという人が、統計の中で理論と実際をもっとくっつけなきゃいけないという話をしました。その後で Integration of

Statistics の Committee というのができたんですね。それへ入ってくれといわれまして、統計教育の方からこっちへ移ったんです。その委員会が何回かありましたね。ワシントンへ出かけたこともありました。

鈴木 ポーランドは1975年ですか。

松下 ええ。この委員会は、この間の発表で、一応結果を出したことになっています。それと、統計教育では、インドのカルカッタでやったときも出ましたね。それが縁だか何だか知らないけれども、今年イギリスのシェフィールドであった国際統計教育会議にも一つの部会の組織者として行きました。しかし統計教育は何も世界的な話じゃなくて、日本でもやらなきゃいけない問題で、それは前から思っていたんです。ISIで世界的な話になったのは、ケンドルが世界的な出産力調査というのを始めたときに、サンプリング調査をすることになった。ところがそれをやる人間が各国にいるとは限らないというわけですね。それで統計教育をしなければならぬとい出したんです。それであんなものができたんじゃないかと思うんです。

アメリカは統計つくるときにホテリングが一生懸命になっていて、ノースカロライナにできた。それからネイマンがバークレイにつくったのですが、それは非常に運が良かったのだということです。ネイマンがバークレイにやってきて、スタティスティカル・ラボラトリーをつくってやっていた。そのときに、たまたま予算が余ったんだそうです。それで統計のデパートメントをつくったというんです。それができてから、方々にでき、統計が、数学とか物理とかと肩を並べるような位置づけができた

わけです。

日本でもそうだろうと思うんです。初等教育をこのごろ盛んにやっていますけれども、それは確かに下から積み上げるのも一つの手段けれども、僕は、本当は統計が一つの学科として認められ、数学、物理、化学等と肩を並べるようになれば、大抵の問題は片付くと思う。科学研究費の問題だって、すぐに片づく話じゃないかと思うんです。

鈴木 ヨーロッパでは大体数理統計的なものは、アメリカはもちろんだけれども、イギリスに比べても、日本に比べても遅く出発しているんですね。だから、統計学会みたいなものがドイツでもできないんじゃないですか。

松下 学会はあるようですよ。統計学科は、ドルトムントにアイカーという人がつくったんです。方々にそういう動きはあるようです。それから、バイオスタティスティックスというのがありますね。ドイツでは、石田君の話だと、ジオメトリーと称して統計をやっているそうです。

鈴木 その動きはわりあい最近のことですよ。フランスはどうなんですか。

松下 フランスは、パリに Institut de Statistiques がありますね。あとは各大学で、たとえばグルノーブルなんか、応用数学の中でやっています。

鈴木 フランスは、統計はそんなに……。

松下 フランスは、2つに分極しているようです。いわゆる数理統計をやっている連中と、あとはデータをいじっている連中ですね。中間的なものが少ないんじゃないですか。

西平 フランスは紛争の後、学部とか学科というのを全部つぶしましたからね。そういう単位はないわけです。

松下 この間ユニバーシティ・カレッジへ寄ったときにストーンが主任をやっていますけれども、彼と話をしたときのことですが、あそこは昔から伝統のある学校ですから、統計も昔からあるわけです。それがいまはDepartment of Statistics and Computer Scienceになっているんです。計算機部門と一緒にしたんです。ところが、これは失敗だったというんです。というのは、計算機部門が入ると、ハードとかそちらの方の連中が入ってくる。そうすると、どうも人間的にも予算的にも、そっちの方がのさばり始めるというんです。

鈴木 予算も使うしね。

松下 それで、統計の円満な発達上、これは良くない。(笑) だから、自分は計算機部門は近いうちに切り離そうと思っていると書いていましたよ。

鈴木 学生なんかもコンピューターの方へ行く傾向が出てくるんじゃないですかね。統計はほどほどにやりながら、コンピューターの方に力を入れた方が、職があるんじゃないかな。

松下 そうかもしれないですね。

鈴木 理論的なことはできなくても、コンピューターの技術を覚えればということですね。それは、学部段階で一緒にしているんですか。

松下 デパートメントとして一緒にしているんです。

鈴木 じゃ学部の段階ですね。

松下 だから、今度は計算機部門のデパートメントをつくり分けるというんです。

鈴木 あそこは、どのくらい統計の人はいるんですか。

松下 ストーンが主任で、もう一人いるんですよ。大体イギリスの学校は、教授は少ないんです。

鈴木 教授は少ないですね。

松下 それで、ピラミッドになっているわけです。

鈴木 リンドレーは、もう全然……。

松下 ストーンはリンドレーに呼ばれたんだといっていました。リンドレーは、最近あんまりあらわれないとかいっていましたね。

鈴木 ストーンというのはベイジアンですか。

松下 いや、ベイジアンじゃないですよ。けれども、反ベイジアンでもないですね。リンドレーが呼んだ位だから。ところで、これは前にケンドールに聞いたんですけれども、ロンドン大学で、教授のポストがあいたときに、統計なら統計の教授推薦委員会があって、だれが適任かということを決め、ロンドン大学に推薦するのだそうです。だから、ストーンはリンドレーが招んでくれたといっていましたけれども、リンドレーがそのメンバーに入っていたか、そこに強く働きかけたと思います。

ユニバーシティ・カレッジというのは、オックスフォードとかケンブリッジに対抗してあそこにつくったんだそうですね。しかも宗教的な雰囲気のない学校としてつくり上げたといっていましたよ。

ユニバーシティ・カレッジの統計のことを書いた小冊子の表紙に関係のあった人の絵が出ているんです。ナイチンゲール、ゴールトン、カール・ピアソン、ステューデント、フィッシャーでしたかね。ナイチンゲールは看護婦として有名だけれども、看護婦をやりながら、いろ

んなデータ処理をした、それが統計の始まりだというわけです。その影響が大きいから、それで彼女を取り上げた。まあ、統計的な処理方法はよくやったというんでしょうね。

西平 あれは金持ちの娘だったんですね。カネを出したんじゃないかと思うんだけど。

鈴木 看護婦というのは、外国ではステータスが高いですね。

松下 そんな話をしていました。

鈴木 おもしろいですね。

ストーンはイギリス人ですか。

松下 イギリス人です。

鈴木 どこなの？

松下 やっぱケンブリッジを出たといっていました。

鈴木 ケンブリッジ出身ですか。ケンブリッジで統計をやっていたんですかね。

松下 何をやっていたんですかね。ストーンは、わりあい数学的なことをちゃんとしていますね。赤池君と早川君がしばらくあそこへ行っていました。

鈴木 ユニバーシティ・カレッジへ行っていたんですか。

松下 ええ、そうです。日本はなかなか優秀だといっていました。そのときに、雑誌の話が出まして、アンスコムが本を書いたときに、統計の雑誌として、イギリスの「Royal Statistics Society」のA、B、Cと「Applied Statistics」、それに「Biometrika」と、アメリカのJASA、Annals、Technometrics等、イギリス、アメリカ以外の雑誌として、研究所の「アナルス」と「サンキャ」と、ISIのReviewとBulletinを挙げている

んです。ストーンは研究所の「アナルス」は、いい雑誌だといっていました。

鈴木 論文の質がですか。

松下 そうです。

鈴木 「アナルス」が出てきたんで、「アナルス」の話の方へ移りますが、始まったのはどういうきっかけですか。

松下 こういう雑誌を研究所としては出さなきゃいけないということは、始め河田さんと話をしていました。戦争中は、予算はわりあいあったんですけども、物がなかったんです。印刷能力なんかもちろんない。それで初めはガリ版刷りで「講究録」というのを出したんです。それは主に速報的な意味もあるけれども、それだけじゃ足りないから、外国文献の紹介でも書こうというわけで始めたんです。あと、講究会みたいなところでしゃべったことも書こうということにしました。

そういうことをやっていって、とにかく、外国人に読んでもらえるようなものでなければいけないというわけで、英語だけに限定するのではないけれども、外国語で書くもの、それも国際通用性のある言葉でですね、それを始めようということになったんです。

それで、論文をいろいろ準備しようということになって、これは「講究録」と違って、オリジナルなものでなくちゃダメだということで、初めからレフェリー・システムをとることにしたんです。最初はレフェリー・システムといっても、やり手はそうそういなかったです。しかし書く方はわりあいに良心的に書いたと思うんです。

さっき話したように、国澤君が、戦争中から確率のことをやっていたね。彼は、実はその研究結果を学位論文にしたいような口ぶりでしたし、それを角谷さんが見ていいといっていましたから、わりあい長いものでしたけれども、じゃこれを載せようということ、それを第一号に載せました。第一号はあとは短かいものでしたね。

鈴木　これは、始まったのは戦後ですか。

松下　戦後です。

鈴木　第1号というのは……。

西平　僕が来てからですから、23年ぐらいじゃないですか。

鈴木　23年ごろ、ボリューム1ですか。

松下　2次形式の独立性の話が3つぐらいそれに載っているんですよ。小川、坂元両君が書いて、僕が書いた。

問題の中心は代数的なものでしたから、僕は簡単な代数的な証明をしました。この証明が後にアンダソンの注目を引いたものです。この頃河田さんはもう工大へ行って居なかったです。

1号を出すときにも、僕は初めの印刷から世話をしました。印刷屋をたまたま知っていたので、——その当時にかなかなかできなかったんですが——その人に無理に頼んでやってもらって、結局最後の刷りは大日本印刷か何かに行ったんです。組むにしても、そこの手を相当借りたと思うんです。それで第1号ができてきたのですが、初めは急いでやったものですから、カバーも白いもので、その次から、いまのネズミ色みたいにしたんです。

雑誌の名前も、何という名前をつけようかということ、で話をしたのですが、「アナルス」にしようということに



なり、研究所の名前は、いまの「Institute of Statistical Mathematics」ということで始めたんです。

そのとき、大体いまの予定で所内の人間が書いていくとなると、あんまりたくさん出そうもないから、年に2回ぐらいがいいだろうということになったんです。だから、初めの5巻ぐらいは年に2冊ですよ。そして出し始めて、最初は知ってもらわなくちゃいけないからといって、方々に配り始めたんです。交換してくれるところはしてくれといってやりました。そうしたら外国人の投稿が来始めました。最初に載ったのは第2巻(1950)だったと思います。

そのころから外国から照会が出始めまして、交換なんかもやってやろうということで、アメリカあたりからも来出したんです。アメリカの「Annals」なんかわりあい早かったと思うのですが、あそこ、アメリカのStatistical Association、American Mathematical Society等の雑誌ですね。それから太平洋岸で出している「Pacific Journal of Mathematics」です。これは後になってからですけれども、その前に「サンキヤ」を始めとして、割合方方から交換が始まったんです。

外国に知れわたるにつれて、だんだん外国人の投稿も増えてきましたね。それも、ちゃんとレフェリーにかけてやっていましたから、向こうも相当なものを送ってくるようになりました。レフェリーもだんだん日本人だけじゃ足りないからというんで、外国人も頼んで、大分外国とのやりとりが盛んになってきたんです。

そのうちに、交換雑誌の数も増え、また普通だとなかなか手に入らないような資料も来始めました。

兎に角アナルスが評判がよくなって行き、日本を代表するような雑誌になったということは非常によかったと思うんです。

鈴木 ずいぶん長く続きましたものね。

西平 1つの機関で出しているなんて、そんなにないですね。

鈴木 そして、これだけ国際性を持って。フランスのモンペリエ大学なんかへ行っても、ちゃんと研究所の「アナルス」はあるし。

松下 いま統計やっているところは、ほとんどあると思います。

鈴木 あるでしょうね。しかし、それは大変なことですよね。

松下 後になってみんな手伝ってくれるようになってからは、昔ほどあれもこれもやるということとはなくなったんですけれども、こんなに長くエディターの位置にいたというのも、よそを見ても少ないんです。

西平 それで有名になっちゃったから、今度日本の研究者が外国の雑誌に書けるようになってちゃって、日本の雑誌に書くよりは向こうの雑誌に書く。仕方がないことですね。それがなければ、こういうことにはならなかったわけですよ。

松下 そういうことですね。今後どういうふうになっていくか知りませんが、30年1区切りいろんなものが変わっていきますからね。兎に角この間日本人のレベルを外に見せることができたということはよかったと思うんです。

鈴木 これは大変なものですね。

松下 途中でいろいろなこともありましたけれども、まあまあ切り抜けてこれました。

鈴木 これだけでも松下さんは紫綬褒章とか何か……。 (笑)

松下 僕がやめたのはストーンなんかも知っていましたけれども、それだけ向こうが雑誌が来ればすぐ見るということなんですね。これは変わったなということがわかるわけで。来ても放っておかれるよりも、見られるということはいいと思うんです。

鈴木 出版コストというのは、どんどん上がってきているんですか。

松下 それは上がってきています。ここの松本印刷というのは、昔から来ていますが、良心的によくやっていると思います。しかしここに来る迄には色んないきさつがありました。

鈴木 これからの日本の統計学の展望はどうですか。

松下 やっぱりうんと進歩するためには、個人個人がしっかりやらなければ、どんな制度ができたってダメです。しかし統計学科なりがないと、いろんな障害があることも確かですね。早い話が学位を出すにしたらってむずかしいですから。

昔、末綱先生のころから僕は、研究所で学位審査ができるようにしたらどうかということをお願いしていたんです。あの先生はとにかく学位は大学で出させるというわけですね。というのは、僕なんかがいえば、それで出るのはずた。研究所はやっぱり研究だけにしほった方がよいと云いました。

僕は、統計を盛んにするには、研究者を養成することも含めて、やっぱり統計学科がないとうまくいかないと思ひ、そういうことをいつてきたし、出来ることはしてきたんです。

実際、学位のことについても末綱先生は、僕に話してくださいなんていうんです。(笑) 東大へいうにしても、そうです。後になって僕は工大の国澤君に、話をして、数人出してもらいました。しかしやっぱり主導的な立場ができないと、困りはしないかといっていたのです。

鈴木 僕の時も、河田さんとか、吉田先生もいたかな。

松下 吉田耕作さんは話がし易かったですよ。吉田耕作さんという人は、昔僕が東大にいたころ、阪大で講師をしていて後から名古屋に来ました。その頃からの知り合いです。

鈴木 代数なんかずっとやったら、本当に浮世離れして、数学三昧でいられたんじゃないですかね。

松下 そうですね。しかし、戦争中僕は、幸い飛行機のことには頭を突っ込んでいることになっていましたから、兵隊には全然関係なかったですけれども、ほかの連中は行って死んだり、いろいろなことがあるわけですね。それで、安閑としてこんな調子でいいのかなということは考えるわけです。

その当時は、パスツールがいったという「科学には国境はないけれども、科学者には祖国がある」という言葉がはやりまして、中谷さんなんという人は、盛んに国のために日本の科学が大事だと云っていました。

鈴木 いまだってそうですね。

西平 いまはまあ……。 (笑)

鈴木 やっぱ「アナルス」をずっとやって日本をこうやってきたということを示すことになりました……。

松下 それは、日本という意識はあります。

鈴木 それくらいにしておいて、また松下さんがせひこういう話をしたいということがあれば……。

松下 云い落しましたが、ISIの関係で、僕は Statistical Theory and Method Abstracts という雑誌の日本地区のエディターを最初から二年許り前迄やっていました。またベルヌーイ協会の評議員等やっています。

またやったことを2つばかりいいますと、初めはデジジョンの話ですね。そのときから考えができたんですけども、あとずっとやってきた主なものはアフィニティの話です。それが分布が2つからたくさんの方ですね。

前に統計の展望のことをあまり云わなかったから、それに関連してこれからの統計のことを少し云いますと、統計自体は、本当は理論的な発展をさせなければいけないし、それと同時に、それが実際の適用と離れていると困るわけです。ちょうど僕は、物理をやるのと同じじゃないかと思うんです、実験物理と理論物理とあって、両方がかみ合っていくということと。

統計自体は、初めグラントなんかやっていた頃は、あまり数学が使われなかった、所が数学を使うことになって、数理統計と称する方面に非常に発達したわけですね。数学を道具として使ったこと、それが第1の転換のきっかけで、第2の転換のきっかけになるものは、電子計算機を使うことで、それによりいままで計算できなかった

ような大量のものが計算できるようになったこと、シミュレーションができるようになったこと、データの模様のグラフ表示が出来るようになったことだと思います。それをうまく取り入れることによって、別な飛躍をするんじゃないかと思います。単に計算するだけじゃなくて、計算機をそっちの方面に使っていったらいい。

鈴木 そうですね。理論の発展に……。

松下 そうなんです。たとえばあることをやっても、実際にどんなふうになるか、シミュレーションでうまくいくかどうかを調べる、つまり実験してみることですね。そういうことができるようになったから、それをうまく使えば、やっぱりいままでと違った、単に式で極限分布がどうだとか、これは収斂が早いとか遅いとかという話じゃなくて、別なことができるんじゃないか。またいままでは級数なんかでも、収斂が遅いから使いものにならなかったけれども、このごろそれが使いものになっています。

鈴木 コンピューターが早いですからね。

松下 先の項まで計算ができますから、そういう意味でいままで使われなかったものを使うことができるようになった。計算機が使えるところでは、そういうことに使っていけば……。マイコンが発達していろいろできるようになったから、それだってある程度のシミュレーションなどができます。ただ、現在のマイコンは、乱数を出すのに、本当にいい乱数が出せるかどうか問題ですけれどもね。計算機ばかりいじっていたって、両方がみ合わせていかなければしょうがないです。

鈴木 松下さんはいま65ぐらいですか。

松下 そうです。

鈴木 今後、ご自分の統計学の方でどういう方面でいままでの経験を生かすか。やはり国際的な面でもう足を突っ込んでいっていますからね。コミットしているから…。

松下 そうなんです。好むと好まざるとにかかわらず、向こうからいってきますから、これはある程度やらざるを得ないと思います。それから、自分のことは、もう少しやりたいことはあるんですけども、ただ、さっきの計算機にしろ何にしろ、一人でやるのはなかなかおっくうになっていきますから、適当にだれかに頼んでやってもらう。やる方針はいろいろ考えられますけれども。

鈴木 年を取ればやっぱりおっくうになるでしょう。30代、40代、50代とずっと違ってきますね。

松下 そうですね。たとえばコンピューターを使うにしても、自分でもある程度はできますけれども、複雑なプログラムをつくるというのは、めんどくさくなっていますね。

それとあとは、例の大平洋地域統計会議を続けていくということですね。本当はそういうのも、わりあいこっちで苦勞ばかり多くて、個人的にはあまり得がないんじゃないかという気がしますけれども、(笑) やった方がみんなのためにもいいと思いますから。やっぱりそういうことをやって外国人と接触できるようになる人が多いですからね。僕なんかの場合は、幸い論文をきっかけに知り合いになったという人がわりあいに多いですけども。

西平 向こうへ行って、習って何とかということじゃないわけでしょう。

松下 そうです。統計自体は、本当に自分で勉強をやりましたから。本を読んで、本も少しはありましたけれども、あんまりいい本がなかったですね。フィッシャーの本なんか、始めに読むにはいい本とは思いません。(笑)

結局、こういう問題はこうと自分でやっていったわけです。それがあつた面ではよかったような気がします。あんまり本があつて、あれも読んで勉強しなきゃならぬなどというのは、そっちの方に時間をとられてしまいますからね。

西平 このごろはあんまりあり過ぎて気の毒ですね。(笑)

鈴木 読むのにエネルギー使ってしまひまして、自分の頭で考えるまでに疲れちゃひましてね。

松下 昔、1つ読んだら10考えろということをおかれたんです。

西平 末綱先生なんかも、やっぱり読み過ぎちゃつてという感じですね。

松下 河田龍夫さんが、初めにうまいことをいったと思うんです。研究者になるためには、多く知る必要はないというんです。つまり、研究する能力、余地を残しておく方がいいというわけですね。教えるには、たくさん知らなければならぬけれども、研究するにはそんなにたくさん知る必要はない。これはほんとだと思います。

前はそんなにテレビもなかったですから、時間をそんなことでとられることもないし、いまの方がそういう点では環境的に見てちょっと気の毒な気がしますね。本はたくさんあるし、あれも読まなければいかぬ、これも読



まなければいかぬなんて思うとね。そんなことは、前は  
なかったですからね。そういえば、昔は僕は、数学の本  
だっけそうたくさん読んだわけじゃない。

鈴木 松下さんは、このヒヤリングではお若い方でしょ  
う。一番年上が有沢先生とか、佐藤先生ですね。

松下 佐藤さんでしょうね。

西平 松下さんが一番若いんじゃないかな。

鈴木 松下さんなんか健康に留意しておられるようだか  
ら、長生きされて……。 (笑) 佐藤さんはまだぴんしゃん  
していますね。